



城

第三十五回 堀越御所

～関東の戦国時代の幕開け～

山本 忠博

第31回では関東の争乱について書きました。それを見て頂ければお解りのとおり、関東は室町幕府の成立以降も争い事が絶えませんでした。ですから、関東の戦国時代の始まりをいつにするかは、なかなか難しいのです。ただ、一般的な答えとしては、北条早雲ほうちょうそううんの伊豆討ち入りという事件から始まったとすることが多いようです。今回は、この伊豆討ち入りの舞台となった堀越御所をご紹介します。

堀越御所

堀越御所が築かれた経緯は、第31回に書きましたが、ここで簡単におさらいをしておきましょう。まず、室町幕府の関東の統治機関として、鎌倉府かまくらくがありました。その長は、将軍家の一族である鎌倉公方かまくらくぼうです。この鎌倉公方が将軍家と対立し、半ば独立勢力化し始めたため、将軍家は、新たな関東統治の長として、時の将軍の兄である足利政知あしかがまさともを関東に下向させました(1457年)。しかし、この時に、鎌倉公方は下総国古河(現茨城県古河市)に追われていたとはいえ、その勢力は依然として強く、さらに幕府の介入を嫌う諸勢力の思惑もあって、政知は、鎌倉に入ることができませんでした。そこで、伊豆国堀越ほりこし(現静岡県伊豆の国市)に居館を築くこととなります(1458年)。これが堀越御所です。そして、政知は堀越公方ほりこしぼうと呼ばれることとなります。ちなみに、鎌倉公方は、古河に移ったために、古河公方こがぼうと呼ばれることとなります。

政知の苦闘

政知は、室町幕府8代将軍の足利義政よしまさの異母兄にあたる人です。しかし、幕府の公式記録では弟にされています。これは、母の実家の格の問題です。政知は、年上ながら義政より下に扱われ、幼少のころから寺に預けられていまし

た。その彼を、弟の将軍義政が呼び戻し、関東に下向させたわけです。この話からだけでも、政知が周囲に翻弄されていたことがわかります。

さて、ここで、政知のおかれた立場を考えてみましょう。彼の前半世を見ればお解りのとおり、彼に自前の軍事力はありません。また、彼の関東下向に合わせて将軍義政が諸大名に号令した古河公方討伐が頓挫し、後ろ楯の幕府の権威は低下してしまいます。さらに、幕府としては、彼に第二の古河公方になられては困るので、実権を与えませんでした。

政知にとって、これではどうしようもない状況ですが、意外に彼は粘ります。関東支配のために、結果として水泡に帰したとはいえ幾多の努力をしました。そして、晩年に至って、次男義澄よしずみを京都の将軍家に送り込み、三男を堀越公方の後継ぎとしました。これには、次男を将軍職に就け、三男を堀越公方にして、古河公方討伐を再開させる意図があったとされます。政知の行動は裏目に出ることが多いのですが、次男を将軍にする計画(だけ?)は、政知の死後とはいえ見事に成功しました(1493年)。政知の次男義澄が11代将軍になった後は、将軍職は政知の系統が占めることとなります。ただし、三男を堀越公方の後継に指名したことは、完全に裏目に出ます。

堀越公方の後継争い

政知は、長男の茶々丸を冷遇していました。そして、茶々丸は、次男義澄と三男とは母を異にしており、義澄達の母との仲も険悪でした。そうした状況の中で、政知は、三男を堀越公方の後継に指名し、そして間もなく死亡したのです(1491年)。これでは、家中に争いが起こるのは自然ともいえ、案の定、お家騒動が起こります。茶々丸は、三男とその母を殺害し、クーデターによって堀越公方の二代目となりました。

下剋上の典型 北条早雲の登場

この伊豆国堀越御所の混乱を、駿河国（現静岡県中部）の興国寺城（現静岡県沼津市）から虎視眈々と見つめる男がいました。後に関東を制覇する後北条氏の祖、北条早雲です。

俗説によれば、早雲は素浪人だったとされます。彼の妹が、足利一門で駿河国守護の今川家に側室として入っていたことから、今川家のお家騒動に仲介者として介入し、そして、最終的に妹の息子を今川家の頭首に就けることに成功しました。その功績によって、駿河国東部の興国寺城を与えられたとされます（1487年）。

しばらくして、駿河国の隣である伊豆国で、堀越公方家のお家騒動が起こります。この混乱する国を早雲が見逃すわけもなく、自身の兵2百に今川家の援兵3百を合わせて、海路から伊豆国に侵入し（1493年）、堀越御所の茶々丸を自害に追い込みました。その後、彼は、投降する者は許し、抵抗する者は徹底的に討ち、領民への賦役と税金を減らしたので、たちまちのうちに伊豆国は早雲の手に帰したといわれます。この素浪人あがりの者が將軍家の一門を討った事件は、下剋上の典型とされ、早雲の伊豆討ち入りと呼ばれて、後世に語り継がれることになります。

早雲の実像

以上の俗説は、物語としては面白いのですが、素朴な疑問も湧いてきます。素浪人の妹が何で名門今川家に居るの？素浪人の言うことなんかをなんで名門今川家の人々が聴いてくれるの？……等々。

実を言うと、早雲が何者なのかという研究は数多くされていて、今では、室町幕府の高級官僚の一族の出である伊勢盛時であろうとされています。早雲の一連の行動を、幕府の高級官僚のものとして見てみると、合点がいくことが多くなるのです。家格は悪くありませんから、妹（現在では姉とする説も有力）は側室どころか正妻であった可能性があります。伊豆討ち入りにしても、攻撃対象が將軍義澄の母と弟の敵であることを考えると、彼の個人的な野望だけで為されたとは思えなくなります。早雲の行動については、將軍家と今川家の意向に沿った、両家の威光と軍事力を背景に行われたものと考えるのが妥当です。

伊豆討ち入りの経過にしても、俗説と現実

の間には微妙な違いがあり、実際には、伊豆国の平定に数年を要し、茶々丸を自害に追い込むのにも5年ほどかかっています。

ただ、早雲が伊豆国に善政を敷いたことは確かなようで、領民への税を4公6民^(※)として、当事としては最も税率を低くしました。これは、以降の後北条家による領国経営の基本となり、当家による約百年にわたる関東への侵出とその支配を実現させる大きな要因となりました。堀越公方の足利政知が夢みた関東支配を、堀越御所を攻め落とした後北条家が、それを皮切りに実現させたというのは、歴史の皮肉と言ったところでしょうか。

現在の伝堀越御所

現在の伝堀越御所の地（伊豆の国市寺家）には、何もありません。ただの更地です。そのうえ、“伝”の文字が頭に付くことから察せられるように、ここに御所があった確証はありません。なぜなら、この付近は、鎌倉幕府執権の北条氏の本拠地でもあったため、なんらかの歴史的遺構があっても、それと執権北条氏との関係を否定しきれないからです。それに、御所の遺構らしきものとしては池の跡くらいしか見つかっておらず、御所の建物が何処に在ったのかはさっぱり判りません。ちなみに、池の跡も埋め戻されていて、現在は、ほんとうに何もありません。

とはいえ、戦国時代の幕開けの地と思ってここに立つと、歴史好きの者には、なかなか感慨深いものがありますし、周囲には、上述の執権北条氏の史跡、例えば、北条政子の産湯の井戸（本物とは思えないが……）などもあって、それなりに楽しめます。



伝堀越御所

(※) 年貢を40%とし、残り60%を生産者の取り分とするもの。通常は5公5民～6公4民。